
家族になろうよ。

勇希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族になろうよ。

【Nコード】

N7607A

【作者名】

勇希

【あらすじ】

変わらない景色と変わらない性格。人は一人で生きていける。ずっとそう思っていた主人公がある日色々な事情を持った人間に出会い共同生活（家族）をする物語。主人公はこの生活を渋々受け入れるが果たしてこの生活が終わる頃彼に心の変化はあるのか？

それぞれの事情

祐二の場合 鬱陶しいある春の朝、学生とかだと出会いや別れがあるが俺には関係ない。なんてたつて天涯孤独な身、もちろん友達はあるがそんなに深くはない。自分で一步線を引いている。

それはまあおいおい話す事にして今日はバイトがある日だ。朝から晩まで過密スケジュールだ。高校なんかろくに行かず自分の生活を成り立たす為にしてきた事。この生活には満足してる、両親が俺を捨てた事はいまさらどうでもいい話だ。あの日以来一人で生きると決めそして今までこの一人の生活を充実して過ごしてる。そう、これからもこの先も同じ様に、、

愛の場合 今日私の誕生日、でも誰も私の生まれた日なんて祝ってはくれない、物心ついた時には両親はいなく親戚中をたらい回しにされた。誰も私に興味がなかった。高校までは通わしてもらったけど高校卒業して私はすぐに家に出た。あの家に居たくなかった、居たとしてもまるで空気の様な扱いだから。

孝志の場合

子供が手を離

れ私は妻に離婚を突き付けられた。

思えば自分勝手な行動でよく家族を傷つけ困らした。人は無くして初めて気付く大事な物がある、だから後悔をする。しかし、、

洋子の場合

またやってし

まった、、これで何回目だろうか？男に騙されお金を盗られてしまった。

もう貯金も底をついてしまい住む所もない。

これから私はどうすればいいんだろうか、、

優衣の場合

もう何日になるだろうか？

この雨はいつまで続くのだろうか？さすがに家が心配だ。固く丈夫とは言えもう無理だろう、、このままあそこに住み着くのは。また辛くて苦しい住居探しをしなくてはいけない、、

それぞれの事情（後書き）

最近DVとかが頻繁に起こってますよね。ちょっと違うかも知れませんがこの話で少しは家族と言うのを大切にしてもらえとうれしいです。

少年は一人の少女と出会う。

祐二

「お疲れ様です」

今日も長いバイトが終わった。

俺が働いてるのは有名な飲食店（チェーン店）だ。

俺はキッチンをしている、理由は他人とそんなに関わりたくないから、言われた料理を調理するだけ、まあそのおかげで自宅でも自炊をしているから経済的には結構楽なのだ。

仕事が終わる

通い慣れた帰り道を歩いているとふと一人の少女が道端で座っているのを見つけた。うーん、、邪魔だ！ 何なんだこいつ？道に座りやがって！まあ、いいか。俺は彼女の横を通り歩こうとした時、突然

？

「あのーすいません。私怪しい者ではないんですよ」

そう言って彼女は俺の前に立つ、怪しい者ではないって言った奴に限って怪しいんだよ！

？

「えとですねー怒らないで聞いて下さい。１０００円貸してくれませんか？」

祐二

「はあ？」

こ、こいつ何言ってたんだ？馬鹿か？この女。俺は怒りを何とか沈めてその女に質問をした。祐二

「何故俺が君にお金を貸さないといけないんだ？名前も何も知らないんだぞ？おかしいだろ！」

優衣

「はい、すいません。ありがとうございます。」

・次の日

優衣

「あの～起きてください。起きてください!」

祐二

「うう、ゝ、もう朝か?」

優衣

「はい!それですねゝあのお礼としてご飯を作ってみたんですが。」

ゝ

祐二

「うむ、」

俺はテーブルに置いてある物を見て思わず驚いた。 これぞ日本の朝ご飯って感じの物が並べられていた。

祐二

「これ全部お前が作ったのか?」

優衣

「はい!張り切って作りましたよゝ食べて下さい。」

祐二

「いただきます。」

「パクパクパク」

祐二

「何じゃこりゃゝ」

優衣

「そんなに美味しいですか?」

祐二

「早く出ていってくれ」

優衣

「えっちょっ何で、ゝ、」

祐二

「お前、砂糖と塩間違えてるだろ？俺を殺す気か？」

優衣

「あはっ」

祐二

「それよりも、とりあえず飯食って俺バイトだから、分かるよな？」

優衣

「あっお弁当作るの忘れちゃいました」

祐二

「、、、じゃなくて出で行くんだよ。金も貸してやっただろ？」

優衣

「あっ、、、、、、、」

祐二

「どうした？」

優衣

「お金、、、さっきの朝ご飯作るのに使っちゃいました、、」

祐二

「どあほが。」

優衣

「泣」

俺は仕方なくバイトが終わるまで

優衣と言つ女を家に置いておく事にし、バイトが終わって帰ってき
てからどうするか？を話し合う事を決めた。

祐二

「めんどくせえな。」

彼は少女に動かされる

祐二

「お疲れ様です」

ようやく今日のバイトも終わりを告げた。

俺はバイトが終わるなり急いで自宅に戻った。

祐二

「ただいま」

優衣

「あっお帰りなさい。ご飯にする？それとも、、」

祐二

「待て。何故そんなに馴染む？とりあえず飯も風呂もいらん！そこに座れ」

そういうと優衣は正座でちょこ

んと座った。何から話そうか？

いきなり確信突い

ちまうか？よし、、

祐二

「優衣、俺とさ会った時にお前は一人で道に座ってたろ？んで帰る所がないやらなんやら言ってたよな？あれはどういう事だ？」

優衣

「あはゝ」

祐二

「あはゝじゃねえ！」

優衣

「帰る所はないです。家が潰れたんです。」

祐二

「はあ？なんで？てか親は？」

優衣

「いやゝこの雨で、びしょびしょで大破したんですよ。」

こいつ家が大破したのになんでこんな笑

顔なんだ？

優衣

「両親はいません。私が小学校に上がると同時に帰ってこなくなりました。」

祐二

「あっそ、そうか、」

優衣

「あの、もしかして同情とかしてます？もしそうなら私と一緒に住んで下さい。お願いします。何でもします！迷惑かけませんから！」

祐二

「はあ？」

ちょっと可愛そうと思った俺が馬鹿だった。
この女は何故か貪欲だ。何故だ？っていうかなんだ？

祐二

「お前自分で何を言ってるか分かってるのか？」

優衣

「はい！ですから」

祐二

「二度も言うんじゃねえ！」

優衣

「大変おこがましいって言うのは分かってます。」

祐二

「おこがましすぎるよ！何だよ、そりゃ！」

優衣

「分かります。分かります。けど、でもお願いします。次の家が見つかるまででいいですから！」

祐二

「、、、、」

優衣

「祐二さんの邪魔はしません。空気のように扱ってくれて結構です。だからお願いします！」

祐二

「いや、だから、、」

優衣

「お願いします！！！」ちっ仕方ないか、、すぐ出ていくだろう、
そうだな。

祐二

「長期じゃなかったらいい。それと俺のやる事に口出しはするな。
それは守れるならちよつとの間なら住む事を許す。」

優衣

「本当ですか！？ありがとうございます！」

祐二

「うおい！くつつくな！馬鹿！あっちい

け！」

そんなこんなで始まった俺と優衣の共同生活。

はああ一人に

なりたい。

少年とオヤジの出会い

「朝　「さい、、、きて下さい、、、起きてください」」

祐二

「うん？、、誰だ！？」

優衣

「えと、、私です。優衣です！」

ああ、そういえば俺こいつと一緒に暮らすと言っちゃったな、、起きるか。

優衣

「おはようございます！もうご飯出来てますよ！食べますよね？」

祐二

「いらん。お前が作った飯なんか食えない、、」

優衣

「ひ、ひどい！今日は大丈夫です！任してください！」

うむ、俺は優衣の必死さに負けテーブル

「パクパクパク、モグモグ

に座った。

モグ」

祐二

「あれ？普通に美味いぞ？何でだ？」

優衣

「へっへゝ実は料理は得意なんですよ！」

祐二

「ふゝん」

げた。

俺は無関心のまま箸をすすめご飯を平ら

優衣

「あつじやあそろそろ私は学校に行つてきますね」

祐二

「あつおう。じゃあな。」

「-ガチャン」

ふむ、飯を平らげて、優衣の奴が学校に行った。今日はバイトは休みだ。さてと、どうしようか？ うーん

ブラブラしに行くか。俺は服を着替え商店街に向かった。

しかし平日は人が少なくていい。

これは飲食店で働いてるやつの特権ってやつか？ しばらくブラ

ブラしてると腹が鳴った。

時計をみるともう昼過ぎだ。

俺は適当に店に入り昼飯をすました。

うん、退屈

だ、、何かする事ないかな？

まあこれが友達のないデ

メリットではある。よし、CDでも見て帰るか！俺は近くのCDシヨップに入り適当に欲しいCDを買って帰路についた。

その途中、、

「トントン」

肩を叩かれたので後ろを振り替えるとそ

こには見知らぬオヤジがいた。

？

「すまぬ。少年、君の名は祐二君だね？」

祐二

「はあ？」なんかやばそうな奴だな。

祐二

「いや、違います。」

？

「ふっふっふ、待てい！もう調べはついている！私はこういう者だ。」

祐二

「えっ？」

このオヤジ警察か？

何だ？俺は一般人だぞ？ ま、まさか、

優衣か？

？

「もう、逃げられはせん。さて、君の家まで案内してくれ。」

祐二

「ちっ、なんだよ！俺は知らないぞ！あいつが勝手に！」

？

「男は男らしくするものだぞ？びびっているのか？ウオォー」

な、何なんだ？

しかしこのま

まだとめんどくさくなるな。

まあ優衣の奴を渡したら大

丈夫だよな？

許せ優衣よ。

俺は無実だ。

祐二

「ちっ、こっちだ。」

？

「ふっふっふ、早く歩けい！」

変なオヤジを連れ俺は自宅に向かった。？

「うっはっはっは、祐二よ！」

何だ？このオヤジのハイテンションは！

？

「ふむ、、、どうするかな。」

祐二

「おい！おっさん！着いたぞ。」

俺はオ

ヤジを家の中に入れしばし考えた。

優衣のやつは確か親はいないと言ってたよな？

だから

家で搜索願いは出されてないはず、、

じゃーなんで警察が

？ うゝん、、

祐二

「おっさん！あんた優衣に話があるんだよな？」

？

「その前に、、人を家の中に入れたら茶ぐらい出せええい！」

はあ？こいつ、、

祐二

「いいから質問に答えろ！」

？

「ふっふっふ、私は優衣という少女など知らぬ（きっぱり）」

「あんた警察だろ？」

祐二

「ガチャ」

優衣

「ただいま」

？

「お帰り（＾Ｏ＾）」

祐二

「答えるな！出ていけ！」

？

「何故？おーい優衣君、お茶をくれえい」

優衣

「あつはあい！」

祐二

「出すな〜！！！」

何なんだ！

こいつらの息

の合った連携は？

俺ははめられたのか？

祐二

「おい！おっさん！あんた警察なんだろ？」

？

「うっはっはっは〜祐二よ！私はこのいう者だ。」

そついうとそのオヤジは名刺を差し出し

た。

祐二

「うん？株式会社吉田部長伊藤孝志」

・
・

祐二

「おい！てめえ！俺を騙したな！コラ！」

孝志

「うつきよきよきよ」

祐二

「気持ちの悪い笑い方してんじゃないねえ！」

キレた！久々にキレちまったよ！

俺

はそのオヤジに殴りかかった！

しかし・・・

孝志

「うむ、来るか？ほおゝ早いパンチだ！だがしかゝし！」

「ドゴッ」

祐二

「ガハッ」

・バタン

優衣

「ゆ、祐二さん！祐二さん！」

優衣が必死で俺の体を揺らしてくるが力

祐二

がでない。

「グッバイ、、」

「グタ」

孝志

「心配する事はない。彼はお腹が空いて寝てるだけだ。優衣君、、

」

優衣

「は、はい？」

孝志

「ご飯を作ってくれ。できれば油がギタギタの中華を。」

優衣

「えっ？あつはい。」

うん？何だこの香りは？ いい匂いだ、

祐二

「う、うゝん」

優衣

「祐二さん！」

祐二

「あれ？優衣、、何かいい匂いが。」

孝志

「先にいただいている。」

祐二

「あれ？お前、、、この野郎！」

優衣

「祐二さん！ご飯ご飯。」

祐二

「おい！何故あいつも飯食ってんだ！？」

孝志

「教えてやろう。それはなあ、、、腹が減っているからだ。」祐二
「てめえ！何言ってんだよ！この野郎！」

孝志

「くつくつく、来るか？私はお前より強い！」

優衣

「ちょ、やめて下さい！」

祐二

「くたばれ、おっさん！」

孝志

「笑止。」

優衣

「やめなさい、、、やめろー！」

祐二

「ちっ！」

孝志

「命拾いしたな。祐二よ。」

優衣

「ほら、祐二さんもご飯食べて下さい。」

祐二

「うん？ああ、」

俺は箸を取り唐揚げを取ろうとしたら

「パチン」

祐二

「いてっ！何だ？」

孝志

「祐二よ。ご飯を食べる時はいただきます！ではないか？」

祐二

「ここは俺の家だ！何をしようが俺の自由だ！」

孝志

「私は当たり前的事を言っておるのだよ。」

何なんだよ、こいつ！　しかし、ここで揉めると優衣のやつがうるさいからなあ、仕方ない。

祐二

「いただきます。」

孝志

「うむ、それでいい。うっはっはっは」

「ご飯を食べ終わりしばらくぼーっとしてると俺はある事に気が付いた。」

祐二

「おい！おっさん！あんた人の家で何ナチュラルに住み着いてんだ？」

孝志

「ちっ、ようやく気付いたか。祐二よ。」

祐二

「早く出ていけ！」

孝志

「同じ食卓でご飯を食べたらもう家族同然。私はお前の父だ。」

優衣

「おっお父さん！」

祐二

「そこー同意しないように！何ふざけた事言っただよ！訳わからねえぞ？」

孝志

「同じ食卓でご飯を食べたら、」

祐二

「何度もいうんじゃない！」

孝志

「私は今住む家を探しているのだよ。」

祐二

「だから何だよ！知らねえよ！関係ねえよ！」

孝志

「私はここが気に入った。祐二、父は嬉しい限りだ。」

祐二

「お前は俺の父親じゃねえ！頼むから出て行け！」

「コンコンコン」

祐二

「って何表札作ってんだよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7607a/>

家族になろうよ。

2010年12月8日02時20分発行